

あざみ

池松 孝子

あざみは触ると痛い草の代表。花はまるで針山のようで、種子には長い冠毛がついている。青森県や長野県などでは春先にあざみの若芽が八百屋に並ぶという。主にみそ汁の具としてまた、新芽はてんぷらなどにして食す。栽培された「もりあざみ」の根はあざみ牛蒡、山牛蒡、菊牛蒡と呼ばれ、温泉地で販売されているのを目にしたこともある。

牛の舌あざみを残し草を薙ぐ

金居欽一

十年以上も前のこと、長女はエンジンバラの大学で研究生生活を送っていた。最初、研究室の教授の家にお世話になっていたが一か月過ぎた頃、自分の部屋を見つけ引越した。間もなく娘から「わが家にホームステイしない？」と誘いがあった。即、その話に飛び乗り、家族の協力を得るべく相談し、勤め先の夏休みを三ヶ月近く使って、エンジンバラのカレッジでサマーコースに通うことにした。

娘のフラットの窓からは毎日、野兔が何匹も庭を走り回るのが見えた。特に雨上がりの朝、庭の穴から飛び出してびよんぴよん跳ねる兔の家族を見るのは楽しかった。その兔に劣らずあちこちで目にしたのがあざみであった。公園にも歩道脇にも家の庭にも薄紫の花をつけたあざみが目についた。

あざみはスコットランドの「国花」である。国の紋章となったのは十五世紀ごろ、ジェームス三世の時代である。一説によると、夜の闇に紛れて草むらに身を潜めていたノルウェー軍の兵があざみの棘を踏み、痛みに思わず大声をあげた。その声に気づいたスコットランド軍がノルウェー軍の侵入を察知し阻止できたことによる。それからあざみは国の勝利の花とされるようになった。

スコットランドの街は、あざみをモチーフにした図柄の製品に溢れている。家具、食器、衣装などあらゆるものにあざみに由来すると思われる意匠が使われていて目を引く。私は自宅用、土産用として写真立て、文房具、食器、アクセサリなど買い求めたがそのすべてにあざみがモチーフとして使われていた。